

メンタルヘルスが求められる社会

NPO法人名取メンタルヘルス協会

全国には300万人以上の精神障害に悩む人々があります。その中で入院している方が1割、残り9割の方は外来治療に通っているということが、厚生労働省「患者調査」（平成25年度）で発表されています。1000人中約3人（0.3%）が何らかの精神障害に悩まれています。また、自殺や失業などの大きな社会問題の原因の一つになっています。身体の病気とは異なり、精神疾患は検査をしても病気の状態が数値や画像には表れにくく、性格や生活環境なども影響します。病状が改善して退院しても病気の自己管理を継続して行うことが必要なのです。そこでこの退院後の手厚いケアをしているのが、名取メンタルヘルス協会です。

信頼と連携の支援体制

もともとこの協会は、名取市にある宮城県立精神医療センターの医師や看護師などの有志職員が集まり、退院後の患者さんの自立・心の安定のために、平成7年に宮城県精神障害者地域生活援助事業の共同生活住居（グループホーム）として発足させたのが始まりです。「ただいま」「おかえり」という日常の家庭生活の場づくりを大切に、現在25名、25歳～83歳の利用者が名取市内5ヶ所で男女別に4、5名ずつ生活しています。食事や掃除など世話人が5名、薬や通院・日常の相談などを担当する生活支援員3名、経理事務員1名、一人ひとりの相談に応じ、生活目標に沿った支援計画を作成・管理するサービス管理責任者が1名計10名のスタッフで25名の利用者を支えます。管理責任者の奈尾さんは「限られた人数で、一人ひとりの個性に応じた対応ができるのは、行政・病院・就労・介護保険の分野などとの役割分担と連携のおかげです。」と教えてくれました。

社会福祉士でもある奈尾さんは、「従来から宮城県立精神医療センターとの関係が深く、訪問看護等のバックアップ体制が整っているこの協会は、職員にとっても心強い支えになっている」と言います。現在は、精神医療センターをはじめとしたほかの医療機関からグループホームに入居する方も多く、皆が自立に向けてここで共同生活をはじめています。今1名の利用枠に、なんと10名程の希望者が殺到しています。さらに、利用者自身と介護する家族の

高齢化も深刻です。利用者の平均年齢は55歳、やっと医療機関から退院できるとなっても『高齢となった両親の元には戻れない』『一人での生活が難しい』という状況の中でも利用者の受入れは簡単ではありません。協会としては入居希望者の窮状とすでに入居している利用者との相性などを鑑みて受入れをします。平成25年からは相談支援事業も開始しており、在宅で生活している人達のために、名取市から事業所指定を受けてサービス等利用計画の作成も担っています。

ふれあいの場を広げるために

今後の目標は、地域における障害者の社会参加を促進する活動です。そのためにはまず、仲間としてふれあい集うためのサロンを確保することです。皆さんが来てくれるかどうかはわかりません。でも、想いは無理に伝えるのではなく、自然に伝わるのが大事。

『時間はかかるけど、何気ない日常の中で一人ひとりが自分らしい生活を送れることを願っている』それが名取メンタルヘルス協会でも支援している皆さんの共通の想いです。しかし支援する側の人材が不足しています。特に、相談支援事業における相談支援専門員が全国的にも不足しており、名取市においても利用者数に対する専門員の数が少ないのが現状です。福祉サービスの充実のために、支援に携わる人材の育成もこれからの課題となっています。



▲ 雷神山でみんなと交流

NPO法人名取メンタルヘルス協会

〒981-1235 名取市名取が丘二丁目10番1号
TEL : 022-382-7790
FAX : 022-383-5937
E-mail : natmh-nr@galaxy.ocn.ne.jp